表紙の写真：輪島市大沢地区・間垣の里

表紙の写真は、石川県輪島市大沢町に広がる「間垣の里」の風景である。能登半島北西の断崖と日本海に挟まれた細長い土地に、黒瓦葺きの木造民家が連なり、その家々を細い竹で編んだ垣根「間垣」が囲んでいる。風除けとして設けられたこの間垣は、ニガタケと呼ばれる竹を縦に組んで作られ、冬の強風を防ぎ、夏には涼を生む。この独特の風景は、漁業と棚田での農業を営む半農半漁の暮らしの中で生まれ、地域の文化的景観として今に伝わっている。

大沢地区では、こうした人々の生活と自然との共生の歴史が高く評価され、2015年には「大沢・上大沢の間垣集落景観」として国の重要文化的景観に選定された。竹垣、切妻屋根、黒瓦、山から海へと連なる景観が一体となり、能登の里山里海の象徴的風景を形づくっていた。

しかしこの地も、2024年元日に発生した能登半島地震によって大きな被害を受けた。住宅の多くは床下が隆起し、傾いた家屋や崩れた路地には黒瓦が散乱していた。一方で、地中深くまで杭を打ち込んで設置された間垣は、揺れに耐え、その姿をとどめていた。海岸は隆起し、水を失った大沢漁港には漁船が並び、かつて岩ノリやタコ、ワカメが獲れた磯は海面よりも高くなってしまった。

地震発生直後、帰省者を含めて集落にいたおよそ35人は孤立を余儀なくされ、集会所に集まり身を寄せ合った。電気も水も絶たれる中、住民たちは漁船の燃料で発電機を動かし、井戸水を汲み、おせちを分け合って数日間を凌いだ。雪の中、救助のヘリコプターが到着するまで、地域の助け合いによって命をつないだ。今も漁港に残る「SOS 35人」の大文字は、当時の切迫した状況を思い起こさせる。

それでも苦難は終わらなかった。発災依頼の避難生活は現在でも続き、インフラの復旧も着手に時間がかかった。さらには、前年9月の豪雨によって土砂崩れが発生し、ようやく進みはじめていた復旧作業は振り出しに戻された。断水した水道が簡易水道で仮復旧されたのは地震から1年半を前にした、2025年6月に入ってからだった。「地震は大丈夫だったが、豪雨と土砂崩れが怖くて夜眠れない」と語る住民もあり、多重被災の経験に心が折れそうになるとの声も少なくない。現在の大沢町に寝泊まりする住民はわずか4人ほど。昼間に片付けに戻る住民も高齢者が多く、険しい山道を越えての往復は容易ではない。

それでもなお、この地と風景を守ろうとする意志は絶えていない。大沢漁港は地震による地盤の隆起で一時使用不能となり、その後の仮復旧を経て漁業再開の兆しも見え始めていたが、2023年9月の豪雨による土砂災害で再び港内が埋まり、船の出入りが困難となった。そうした中、地区に住むある高齢の兄弟は、自ら重機を操作し、港の一角に仮の船着き場を整備した。住民たちは技術系支援団体と協力しながら水路の浚渫を進め、2025年3月にはようやくワカメ漁の再開に向けて小型船が港に運び込まれた。生活の復旧がままならない状況の中でも、暮らしを立て直そうとするひたむきな努力が続けられているのである。

自然の強大な力を前にしてもなお、ともに生きる知恵が息づく「間垣の里」は、いまでも静かに、だが確かに、再び人の暮らしを迎える日を待ち続けている。

2025年7月

東北大学大学院文学研究科

雁部 那由多